

令和 6 年 5 月 22 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H02321

研究課題名（和文）城下町都市における文化的景観の創造性を視点とした文脈的計画論の構築

研究課題名（英文）Contextual Planning Theory from the Perspective of Creativity of Cultural Landscape in Castle Town

研究代表者

野中 勝利 (NONAKA, Katsutoshi)

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：40302400

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,700,000円

研究成果の概要（和文）：城下町都市の近代化において、歴史的環境を基盤とした「文化的景観の創造性」を視点として、都市社会や市民生活との関係から空間利用やその議論を分析した。濠の埋め立てと保存に関する議論があったことを示した。近代の天守が保存された過程と、その天守の活用の実態を明らかにした。城址の公園設計における風致の保存と破壊の相反する思想を解き明かした。これらの結果を文脈的に積み重ねる分析方法を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歴史的都市において、技術、社会や生活の変化を背景として漸次的あるいは急進的な変容を遂げている。今後の都市づくりにおいては、そうした過程を適切に位置づける文脈化が必要である。本研究では社会背景や都市生活を空間的に整序する姿を文化的景観として視点にすることに新規性があり、その創造性の観点から文脈的に分析する方法を志向することに学術的意義と独自性がある。

研究成果の概要（英文）：In the modernization of the castle town city, I analyzed the use of space and its discussion from the perspective of "creativity of cultural landscape" based on the historical environment. The results revealed the following three points: (1)discussion on moat reclamation and preservation, (2)process by which the keep was preserved and the actual utilization of the keep, (3)conflicting ideas of preserving and destroying the natural beauty of the castle ruins in park design. I examined analytical methods for contextually stacking these results.

研究分野：都市計画

キーワード：文化的景観 城下町

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

わが国には近世城下町を基盤として形成された、いわゆる城下町都市が多い。この城下町都市では、最近、城郭建造物や工作物の復元整備、濠の復元や浄水化、旧街道の整備など、城址及び城址周辺の景観整備などが進んでいる。こうした城址を中心とした城下町都市の都市づくりの取り組みは、近世城下町を基盤とする既成市街地を中心としたコンパクトシティへの志向、さらにはシビックプライドを醸成する志向にも合致する。このような城址を中心とする市街地のもつ求心性や再価値化を通じた都市づくりの計画方法論の再構築は課題になっている。

### 2. 研究の目的

城下町都市の近代化における歴史的環境を基盤とした「文化的景観の創造性」を視点として、同時代的な都市社会や市民生活との関係から空間利用やその議論を分析し、近代都市づくりの計画技術とその思想を解き明かして意味づける。

その上で、それらを相対的に積み重ねる文脈化という分析の方法とそれによる計画論を構築することを目的とする。

### 3. 研究の方法

(1) 城址の近代化の過程は濠の埋め立ての歴史でもある。埋め立ての契機は汚濁による不衛生の問題のほか、宅地化や道路、鉄道の敷設など、都市や時期によって多様である。近代の都市づくりにおいては、こうして濠の埋め立てが進む一方、史跡や風致への関心の高まりを背景として埋め立て反対の世論や運動があったことを小田原や和歌山の事例を発掘して明らかにしたが、それ以外にも同様の事例がある。その事例を対象にして、濠の埋め立ての契機や目的、その賛否の議論などを明らかにする。その上で、城址の史跡や風致保全を通じた近代化に伴う市民社会の成熟過程を分析し、文化的景観の創造という観点から当時の構図を明らかにする。

(2) 明治中期以降の近代において全国で19の城址に天守が存在した。これらの天守に関しては、主に建築史の分野から建築様式や文化財としての価値などが語られている。しかし天守内部の一般公開や保存修理後の利用については十分に明らかにされていない。史資料の所在が確認できた天守の事例を対象として、一般市民に天守の内部を公開する社会背景や、それに伴う市民生活への影響などを分析する。その上で、近代化における文化的景観の創造性という観点から天守の保存や利用に関する計画の社会性や思想を文脈的に考察する。

(3) 近代的土地利用としての公園は、明治初年に政府によって施策化された。廃城となった城址を中心に公園化が進み、当初は城址の土地としての保全の方策として公園化が導入された。明治中期以降は政府にとって不要になった「存城」が払い下げられ、そうした城址でも公園や遊園として開放された。その時期から公園設計を専門家に依頼するようになった。専門家の一人である本多静六による公園設計をもとに、その計画技術と計画思想を、当時の社会背景や市民生活との関係、城址の風致との関係、事業化との関係などから分析する。そして社会背景や意識の変化に伴う計画技術の変化を含めて文化的景観の創造性の観点から文脈的分析を行う。

(4) 研究課題に応じた研究対象の現地に赴き、市役所・議会事務局、公文書館、図書館、博物館・資料館などで、分析する史資料(当時の公文書や記録、議会議事録等の議会資料、文献、地元紙等)の確認・収集等の資料調査、地元の学芸員等へのヒアリング調査、実地の景観・眺望等の調査を行う。そして文化的景観の創造性の視点から、同時代的な都市社会や市民生活との関係をもとに空間利用やその議論を分析し、近代都市づくりの計画技術とその思想を解き明かす。

### 4. 研究成果

(1) 柳川、静岡および熊本で、それぞれの城址の濠の埋め立てに対する反対意見があった。濠の埋め立ては、風致を毀損する行為であり、歴史的環境である城址の濠を保存することの意義を問う社会的世論として捉えることができる。濠を埋め立てる計画は公的主体であるが、都市生活者からの反対意見が議会での議論を通して表面化したことがわかった。

(2) 和歌山城天守や高知城本丸御殿では甲冑、刀剣や書画などの古物が陳列された。当該地の歴史的資産を展示することで天守の利用価値や存在価値を高めた。和歌山城天守はその後、物産陳列所の第二陳列所にもなった。高知城天守も公開され、本丸御殿の公開とともに、城址本丸が地域の共有財として利用された。

(3) 明治6年に博覧会場として利用された松江城址では、天守の公売による払い下げが撤回され、保存されることになった。そして老朽化が著しかった天守の応急的修理がされ、公開もされた。城址が松平家に払い下げと、天守の本格的な修繕がされることになった。その後、松平家は、

島根県庁舎として無償貸与していた敷地を島根県に、そのほか神社境内を除く城址を松江市に無償譲渡した。天守は国宝に指定されたが、松江市には修繕するだけの財政的余裕がなかったことから放置されたことがわかった。

(4) 明治前半期に保存が決まった姫路城天守は、ようやく明治 43 年から国費によって修理されると、大正元年に陸軍で使用していなかった天守一帯が姫路市に無償貸与されることになった。姫路市はその地をもとに姫山公園を開設し、一般に開放した。公園の開設に伴い導入路が整備された。天守の内部も公開され、有料で入場者を受け入れた。姫路城址は陸軍の連隊や練兵場と公園が存在し、閉鎖空間と開放空間が並存していたことが明らかになった。

(5) 大垣城は「廃城」に分類され、城郭建築や工作物は払い下げられたが、天守は免れた。大垣藩で藩校の教師をしていた一柳元吉が、天守が立地していた旧本丸を中学校用地にすることを申し認められた。しかし学校の建設は進まず、岐阜県から督促され、公園にすることが決まった。このように旧本丸の保全が担保された経過が明らかになった。廃城城址の公園化による城址の保全は各地で漸次的に進んだが、その前に学校用地としてその目的を達成しようとした取り組みは、全国的に特異な例だった。ただし天守の利用方策については示されていない。

(6) 大垣では度々大雨による洪水被害があった。明治 21 年の大洪水では、市街地は冠水した。しかし天守台石垣上に立地する大垣城天守は冠水することはなく、多くの避難者を受け入れた。明治 24 年の濃尾地震では屋根上の鯨が落下したが、倒れることはなかった。そのため明治 29 年の洪水被害でも被災者を収容し、炊き出しをする拠点として機能することができた。天守は、近代社会における災害時の一次避難所としての役割を担ったことが明らかになった。この浸水の最高点が天守台の石垣に刻まれ、その記録を後世に引き継いだ。

(7) 大垣には明治 42 年と同 43 年の二回、行啓があった。この二回とも天守には御座所が用意され、武器、古器物や古書画などが陳列された。皇太子は展示を見るとともに、最上階から眼下に市街を眺めた。大垣城址は明治 14 年に大垣公園として開設され、その公園では各種の催しや集会が開催されたが、それに併せて天守は各種の展示会場として利用された。日清戦争に関連して大垣公園で戦勝の祝賀会が催されると、天守は戦利品陳列所として利用され、多くの参観者を受け入れた。また大正 4 年の御大典奉祝式が城址の招魂社で挙行された際には、天守にはイルミネーションが施された。このように天守が近代社会における都市装置としての機能を重ねていたことが明らかになった。

(8) 大垣では、昭和 9 年に戸田公入城三百年祭が盛大に催されたが、その際には天守と武徳館を会場として古武器武具陳列と遺墨古文書展覧会が開かれ、好評を博した。三百年祭の遺産を後世に残す意義から、大垣出身者の実業家からの篤志を得て、天守を利用した大垣市立郷土博物館が昭和 10 年に開館することになった。それまでの天守を利用した期間限定の展覧会の実績がこうした常設の公立博物館へと結実した。近世遺産が近代の都市施設へと転換した。昭和 11 年に天守は良隅櫓とともに国宝に指定されたが、天守は博物館として活用されたまま、文化財になった。災害時の避難所や文化財の保存と活用といった現在の意義を、近代の大垣城天守は実践していた。

(8) 松平家から松江城址を無償譲渡された松江市は、その公園化を図るべく、その松江公園の設計を本多静六に依頼した。本多は公園に対する市民の意向を募ることにした。それまでに本多は各地で公園設計をしていたが、和歌山城址での和歌山公園の設計では南方熊楠や和歌山市議会から反対意見が強く出され、和歌山県がその設計を承認しなかった経験があった。そうした背景から、事前に地元の意向を汲み取る手続きを採ったのではないかとみられる。地元の意向を取り入れた公園設計がまとめられたが、松江市の財政状況から、その一部が整備されただけだった。

(9) 同時代的な都市社会や市民生活との関係から、歴史的環境を基盤とした文化的景観の形成にかかる近代都市づくりの空間利用やその議論を位置づけ、その計画技術や思想を解き明かした。そしてそれらを相対的に積み重ねる文脈化という分析手法とそれによる計画論の構築方策を検討することができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 野中勝利	4. 巻 83-4
2. 論文標題 城址公園の発展と太政官布達公園	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 公園緑地	6. 最初と最後の頁 35-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 高田徹、佐々木孝文、森山英一、太田秀春、朝日美砂子、野中勝利、大山僚介、竹内信、工藤茂博、美濃口紀子、向井一雄、松下浩、坂井尚登	4. 発行年 2024年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 456
3. 書名 城郭がたどった近代	

1. 著者名 横浜国立大学都市科学部	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 1052
3. 書名 都市科学事典	

1. 著者名 和歌山地方史研究会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 清文堂出版	5. 総ページ数 259
3. 書名 地方史研究の最前線	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------